

「待つ」ことを考え、実践する

上廣哲治

近年、昔ながらの喫茶店が町から消えつつあります。ほとんどがカフェやスタンドのようなチェーン店になりました。かつて一人で喫茶店にいる客は、新聞や雑誌を読んで暇つぶしをしている年輩の男性か、待ち合わせをしている人でした。携帯電話のない時代、喫茶店はよく待ち合わせに使われたものです。駅の改札口を待ち合わせ場所にする人もいました。駅には「伝言板」があり、急な用事で会えなくなった時など、チャークで、待ち合わせの相手にメッセージを残したのです。携帯電話やスマートフォンが発達する以前、待ち合わせは日常的な行為でした。誰もが何かを待っていたのです。

ところが、テクノロジーが大きく進歩した今、日常から「待つ」ことがどんどん消えています。私たちはそれを「便利になった」と歓迎します。しかし、本当にそうなのでしょうか。「待つ」という行為にひそむ大切な価値を失ってしまったてはいないでしょうか。

一昨年の春季大会で、子育てに当たって守っていただきたい心構えを、五つのキーワードとして改めて紹介いたしました。「見守る」「待つ」「寄り添う」「受け容れる」「耳を傾ける」です。その反響は大

きく、多くの会友さんから、実行したら子育てにより影響がありましたと、数多くの報告を受けました。本誌の「わたしの体験」や「朝のスピーチレポート」などにも度々、登場しています。五つの姿勢が子育てにいかにか有効か、今さらながら気づかせていただきました。そこであらためて、今回は五つの中でも特に今失われつつあると感じられる「待つ」に焦点を当て、みなさんと考えてみましょう。

哲学者の鷺田清一^{わだきよかず}さんは、著書『待つ』という中で、「かつて『待つ』ことはありふれたことだった。一時間に一台しか来ない列車を待つ、数日後のラブレターの返事を待つ、果物の熟成を待つ、酒の発酵を待つ（中略）。待ちこがれつつ時間潰しをすること、期待しながら不安を抱くこと、そんな背反する想いが『文化』というかたちへと醸成された」と書いています。しかし現代社会は「待たなくてよい社会、待つことのできない社会になった」のです。なぜ、私たちは待てなくなったのでしょうか。現代は、何でもスピードが求められ、効率が追求されます。すべてが短時間に素早く片付くようになると、待つこと、待つ時間は「貴重な人生の浪費・ムダ遣い」と考える人も出てきます。数分後に来る次の電車が待てずに、乗客が、扉が閉まる寸前の電車に飛び乗るのは日常茶飯事の光景です。

人が指先一つで物事を処理できるスマートフォンを手にしたことも、待てなくなった原因の一つではないかと思えます。知りたいことがあるば、検索ですぐに調べられる。遠方の友人・知人ともリアルタイムで話すことができる。しかも画面で相手の表情までわかります。

私たちは効率性や利便性によって、欲しいものは簡単に手に入る、会いたい人にもすぐ会える、行きたいところに素早く行ける、という万能感を抱くようになってしまったのではないのでしょうか。

しかし、やりたいことを何でも行うことなど不可能です。人間の思い上がりにすぎません。一本の苗

木を大木に育てたいと思うなら、数十年、数百年の時を待たなくてはなりません。野菜や果物も、成長にはそれなりの時間が必要です。そして当然、人間の基本的な営みである育児にも、時間をかけなければなりません。

ところで、この歌をご存じでしょうか。

待ちぼうけ 待ちぼうけ／ある日せつせと 野良かせぎ／そこへ兎がとんで出て／ころり転げた 木の根っこ

「待ちぼうけ」(北原白秋作詞・山田耕筰作曲)という童謡です。歌詞はこのあと「楽をして果報を待つ」ことを戒める内容へと続くのですが、この冒頭の何と牧歌的でユーモラスなことでしょうか。

「そんなふうになんびり育児はできない」という声が聞こえてきそうです。赤ん坊、乳幼児期、少年期から思春期まで、親の役割は非常に大きく重い。だから何かをしなければならぬと思う気持ちは大切です。ただ、育児を少し遠くから眺めていただきたい。子どもは「育てる」のではなく、自ら「育つ」のです。子どもだけではありません、親も同様に育っていくのです。日々、世話に追われながらも、かすかな成長の跡を感じ見守る――。成長を待つ間に親自身も、子どもに育てられて成長しているのです。

今プロ野球で最も注目されるピッチャーの一人に、佐々木朗希選手がいます。プロ野球四年目の彼は昨年、投手としてすべての打者を打ち取る、完全試合を成し遂げました。史上十六人目の快挙。二十歳、最年少での達成に日本中が湧き立ちました。その後もめざましい活躍を続け、今や日本を代表する投手です。

しかし、プロ入りしてすぐに活躍できたわけではありません。高校野球でも非凡な才能を発揮してい

た彼は、千葉ロッテマリーンズに入団。その実力からすれば、一軍に登録されても即戦力として十分に活躍できたでしょう。しかしチームの首脳陣は目先の勝利にこだわらず、稀有な才能を伸ばすことに決めたのです。まずは、プロとしては未熟で華奢な体を鍛え、主に二軍で練習を重ね、ケガをしない体づくりをし、大切に育てました。「過保護すぎる」という批判もあつたようですが、佐々木投手もその方針に納得したそうです。コーチや監督は、投手の成長を見守り、花開くときをじつと待っていたのです。キーンワードは、ずばり「待つ」ことでした。「育てた」のではなく、「育つ」のを待ったのです。

人間のみならず、万物はそれぞれのリズムや成長成熟の時間を経て、より善く変容していきます。味噌やお酒もそうです。人間はその恩恵にあずかって、発酵や成熟の技術を磨き上げてきたのです。

待つ姿勢は、大自然の摂理によって人間の身体に予めセットされた能力なのかもしれません。毎日の睡眠の基本もそうです。夜の間、眠ることによって心と体が回復するのを待つのです。そして、夜という時間を越えて、太陽が昇る朝、新しくこの地に生まれるのです。つまり、「待つ」とは大自然のリズムに沿って生きていくことと同義ではないでしょうか。

早寝早起きは大自然のリズムを感じるためにも、大切であることがわかります。同じように子育てにおいても、遠回りに見えようとも、子どもが育つのを待つことが大切なのです。言わずもがなではありませんが、「子どもの成績がよくなる」「勉強するようになる」「百点満点をとれるようになる」のを待つではありません。子どもはその子どもなりに成長していく。それを「待つ」のです。

期待せず、時間をたつぷりとかけて「寄り添い」「見守る」ことが大切なのです。それが親子の、そして家族の仕合わせな時間を、より深く豊かに醸成していくに違いありません。